

豆の町（ビーンタウン）から

こんにちは（第12回）

会員家族 住井 円香

■ヴェネツィア神話を創り上げたブランド戦略の学びから感じるアメリカの価値観

新学期が始まり、西洋美術史の授業で「ヴェネツィア神話 (Myth of Venice)」と呼ばれる概念を学びました。ここでいう神話とは、メソポタミア神話やギリシア神話のような古代の人間の想像力によって育まれた神々の物語とは少し異なるようです。

これから何か月もかけてこの概念をより深く学んでいくため、まだ私もはつきりわかつているわけではありません。ですが、自分の理解のためにも、この概念が何を指すのか、

週間目の今でさえ頭がパンクしそうになるほど、いろいろな設置例を写真で見ることになりました。

これらの宗教的・神話的なオブジェと交易や十字軍の派遣などを通じて得た異国の素材やデザインの見を組み合わせ、ヴェネツィアは異文化と繋がる、清らかな正義の海洋国家として内外にアピールすることになった。現代的に言い換えれば、ブランド戦略に長けた都市国家だったのかもしれません。

前置きが長くなってしまいました。この授業をきっかけに、アメリカにとつての「神話」とは何なのだろう、ということを考えるようになりました。誰でも努力を重ねれば、豊かさを得られるという「アメリカンドリーム」は、大学内の様子からはあまりピンときません。当たり前のようにシヤネルやディオールなどのブランド物のバッグを授業に持つてくるクラスメートや、次から次に有名アーティストの公演に繰り出す知人たち、高級レストランでの食事の様子をSNSのインスタグラムに度々投稿する卒業生など、どこか大学コミュニティだけが浮世離れた空間に思えることもあります。

しかし、決してすべての学生が裕福というわけではないし、お金を得る機会が用意されていない、というわけでもありません。例えば、ペル・グラントという連邦政府が支給する金銭的に困窮する学生向けの奨学金や、ワーク・スタディという同じく政府が認めた学生を対象に大学内、もしくは指定された地域での仕事を通じて賃金が得られる仕組みなどもあります。

各大学も、アメリカ国民である学生に対しては、返済不要の学費援助を家庭の所得に応じて提供します。しかしながら、多くの大学が資金不足に悩む中で、学費援助を提供しなければならぬような学生を探ることに躊躇している、という話も聞くことがあります。特に、学力だけではなく、課外活動や推薦状を含めた多角的な入試を行うアメリカでは、一部を除く、私が通うボストン大学など、ほとんどの大学は合否を決める際に、家庭の経済状況や学費支払い能力も考慮します。個人の経済的背景が合否の判断材料に含まれるとなると、良い教育を受けて良い就職を目指そうとしても、大学受験でそ

の「アメリカンドリーム」が通用しないケースもありそうです。

また、アメリカを象徴する価値観の一つには「自由」もあるように思えます。ニューヨークにある自由の女神や、ペンシルベニア州・フィラデルフィアにある自由の鐘など、建国の歴史にちなんだオブジェには自由を強調するものがあります。

私も高校時代に一度日本に戻り、ボストン大学に入学したことで、改めてアメリカならではの自由さを実感しています。授業中にトイレに行くために席を立つたり、何かを飲みながら授業を受けることもごく当たり前です。多くの学生にとつての「住まい」である寮と大学が一体となっていることもあってか、就活が本格化する前の1・2年生は部屋着のような、日本などアメリカ以外の国では眉を顰められそうなほど、気楽な格好で教室に向かう姿も多く見かけます。

一方で、服装や日常的なふるまい以外の側面が自由なのかという点においては、疑わしくも思えます。どのような意見なら口にしても良いこととで、どのような意見は口にするとが許されないのか。そうした面

に関して気を付けなければならないということが、議論を推奨し、長年言論の自由を尊重（少なくともその自負はあった）してきた高等教育機関ですら、その傾向が少しずつ現れるようになってきたようです。

NPO法人の個人の権利・表現財団が、学生への調査をもとに実施したキャンパス内の言論の自由度ランキングでは、半数以上の大学が通知表のような格付けの結果、最低評価となるFとなっていました。

257校あった対象校の中では、ボストン周辺の2大学がワースト10位にランクインしていました。その一つ、ボストン・カレッジは、閑静な郊外に位置し、イエズス会の教えに基づいた利他的な精神が知られる人気の大学です。大学側がパレスチナを支持する学生のデモを制限したことや、学生へのアンケートで「自分の考えを表現しやすいか」「自己検閲をしてしまうか」などの項目に対する評価が、他の大学より低かったことがランキング下位となった理由のようです。

もう一つの大学は、ボストン美術館のすぐそばのノースイースタン大学でした。イスラエル人の歴史学者

ラズ・シーガル氏による講演を急遽取りやめたことや、学生アンケートの結果では、「政治的に幅広い意見に寛容か」などの項目で、他校よりも低い結果が出たことなどがランキング結果に反映されたということです。

ボストン・カレッジとノースイスタン大学の両校は、学業面でもスポーツ面でも、私の大学のライバル校と位置づけられているため、ひょっとして書きながら多少そうした思いが入ってしまったかもしれません。ただ、ボストン大学も特段自慢できる状況ではないことをその両行の名譽のためには記しておきたいと思っています。今回、全米11位で、かろうじて半数より上にランキンはしていますが、昨年度イスラエルとハマスの武力衝突に関連した企業への投資撤退の是非を問う生徒会が行った学生の投票結果を通知するメールが、大学側に遮断されたことなどを理由に「F評価」となっていました。

先述したランキングでは、ボストン周辺の大学を見る限りでは、イスラエルとパレスチナを取り巻く表現への自由が特に問題視されていますが、アンケート項目にもある通り、

多くの大学が政治的に多様な意見が受容される環境ではもはやないのかもしれない。

先日、アメリカで保守派の政治活動家でトランプ大統領の熱烈な支持者だったチャリー・カーク氏がユタ州にある大学のイベントで演説中に凶弾に倒れて亡くなったという事件もありました。容疑者は、カーク氏の政治的言動に不満を持っていた、と言われています。この事件の後、ABCテレビは自局の番組内で「トランプ大統領の支持者が事件を自分たちの都合の良いように使っている」という趣旨の発言をしたコメディアンの番組を無期限休止にしました。大学もメディアも政治的対立が厳しい中、こうした余波に揺さぶられる日々がしばらく続きそうです。

西洋美術史の授業の話に戻ります。初日にはグループに分かれて、大学の「神話」を考えて、それを踏まえたロゴをつくる、という作業に取り組みました。私たちのグループも他のグループも、19世紀から残るレンガ造りの寮や、私が入学した前年に完成したばかりの19階建てのデータサイエンス学部ビルなど、古さと新しさをセールスポイントと

してロゴに取り入れました。ただ、古さと新しさの両立というのは、世界中の他の大学や、街でもPRしていることのように感じます。「ヴェネツィア神話」のような、唯一無二の倫理観にも訴えかけてくるようなメッセージを打ち出すことは、やはり難しいことなのかもしれません。

ヴェネツィアは、ナポレオンの侵略を受けるまで1千年以上に及び独立を保ってきたことも、聖母マリアにもたとえられるほど、純粹で穢れのない存在としての説得力を増すことになった、と課題の本の一冊に書いてありました。まもなく建国から250年を迎えるアメリカは、建国時からイギリスから離れるか離れないかも含め、「古さ」と「新しさ」、そして個人の権利の保障という意味と、金銭的な意味の「平等」と「格差」など、相反するテーマが、ずっと国を取り巻いているようにも見えなくもあります。「アメリカ神話」を作るにはまだ新しすぎる国かもしれませんが、対立する価値観が共存して苦悩しながら進むものだったり、時には後戻りする姿が、国としての特徴の一つかもしれないと思います。

■大学内の「お城」にある人気のパブ

ボストン大学の真ん中を走るコモンウェルス・アベニューを一本奥に入った道に、チューダー朝風のこじんまりとした「お城」があります。今では大学の略称から「BC Castle」と学生たちに親しまれているこの建物は、元々はボーア戦争（1899～1902年）でイギリス軍に弾帯を提供し、財を成したウィリアム・ウィンジャーの邸宅だったそうで、卒業生向けのラウンジや結婚式の会場として使われています。

「お城」にはもう一つの顔があります。建物の右側面から古めかしいドアを開けると、ここが学校であることを忘れさせてくれるようなパブが迎えてくれます。今年、マサチューセッツ州でも飲酒可能な21歳になったので、初めてこのパブに行ってみました。店内は、赤と白で彩られたカヌーのオールや、ホッケーチームの写真が木の壁に掛けられ、装飾にもこだわられています。お酒にまつわるルールに特に厳しいボストンなので、年齢確認も入念です。入店すると、まず年齢確認を行うスタッフにパスポートや免許証などの身分証

明書を手渡す必要があり、その身分証明書が偽造されていないかどうかを機械でチェックされます。そして、身分証明書が本物であると確認されると、手の甲の上にスタンプが押され、ようやく店の中に進むことができます。

店にある50種類のビールをすべて制覇すると景品がもらえる「Knights Quest」という仕組みもあります。50種類を制覇するのはさすがに大変ですが、それでも景品目当てで毎週通い詰めている学生もいるようです。課題や作業に取り掛かりながら

お酒を口に行っている人も中にはいて、普通のパブではあまり見られない光景かもしれないと思いました。

全学年の学生が入店できるわけではないことから、店内は混雑しておらず、にぎやかさはありつつも、パソコンで作業している人もいるくらいには落ち着いた雰囲気です。残念ながら「Knights Quest」のチャレンジは、大学関係者でなければ参加できないのですが、もしボストンにいらつしやる機会があれば、皆さんもこのパブを訪ねてみてください。